

ちゃんと生きよう。阪神・淡路大震災を経験してそう思った。

住んでいた西宮市上ヶ原のアパート1階がぺちゃんこになり、隣室の大学生が亡くなった。わずか数分離れていただけで彼は即死、自分は無傷。自分に何ができるのか、真剣に考えるようになった。

東日本大震災後、レギュラー出演していたNHKのテレビ番組に、被災障害者から多くの声が寄せられた。

「前途ある人々が亡くなったのに、生き残ってしまった」「自分は生きていて

インタビュー

1.17から

震災19年

④

支援者総合相談センターにのみや
センター長

玉木 幸則



役割のない人間いない

いいのかわからない。そんな内容が何通もあった。悔しかった。障害があってもなくても、人間は生

る限り前途がある。役割のない人間なんていない。コミュニケーションの空気や今の社会の仕組みが、そう

いうことを言わせてしまった。震災があったからではない。普段の社会の空気も、状況はそう変わらない。

阪神・淡路大震災後、災害のたびに「要援護者支援」の課題が議論されてきた。でも、状況はそう変わらない。

災害時だけを考えていても解決しない。重要なのは、障害に関係なく、だれもが自然に日々を営めるコミュニケーション。障害者が「生きていいですか」と言う社会はおかしいと思いませんか。(聞き手・磯辺康子)

3面に続く